阿久比短歌の会「風」令和八年十一月　定例歌会作品

異国語に笑ひあひつつ乙女らは
　毎夕五時にこの道帰る　　講師　中野富恵子

補聴器を借りて装着二週間
　静かに過ごす一日もあり　　南　比左子

夜長でも積んどく本に手を出さず
　目の衰えと理由を付けて　　大村　浩嗣

悔しかり匂い広がり隠られず
　煮魚の焦げ鍋に居残る　　馬見塚まり子

ふる里の家を守れる妹の
　我を待ちおり改札口に　　北中　祥子

釣り糸の僅かな動き見逃さず
　今朝も港にハゼ釣る老いは　　木下由香理

あかあかと梢に残るもみぢ葉と
　散り敷く落葉に秋をとどめて　　榊原　紘子

アキアカネ今年も来たり里山に
　虫の音いや増す秋の夜長は　　稲葉　富子

公園に乗り捨てられし一輪車
　主待つごとくベンチに凭る　　山下喜美子

円空は十二万体彫しとう
　微笑みたたえる像の優しさ　　大村　峯子

大粒なぶどう賜りまといたる
　小さな秋も共にいただく　　山口　道子

捨て切れぬ夢の一つと訥々と
　今日も語れる友の眼差し　　新美　京子